武蔵野日曜集会

我は葡萄樹

――ヨハネ伝第15章1～11節――

１９８４年12月９日（武蔵野）
小池辰雄

我は真の葡萄の樹　汝らは既に潔し　我に居れ　本来の我に帰れ　求めよ、然らば成らん　わが愛に居れ　百行一死に如かず　ああ神よ、願わくは帰りたまえ

【ヨハネ15・1～11】

1 我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。2 おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。3 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。4 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。5 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。6 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。7 汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成らん。8 なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。10 なんじら若し、わが誡命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誡命を守りて、その愛に居るがごとし。11 我これらの事を語りたるは、我が喜悦の汝らに在り、かつ汝らの喜悦の満たされん為なり。

●我は真の葡萄の樹

ヨハネ伝15章は何度読んでも大変なところです。新約聖書で一番大事なところの一つですね。

1 **我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。**

キリストは、「私は葡萄の樹みたいだ」とは仰らない。

「我は真の葡萄の樹。私が本当の葡萄の樹だ。神さまは農夫だ」

と仰る。こういう言には驚きます。葡萄の木は、イスラエルでは非常にたくさんある。

「イスラエルは葡萄の樹の満ちた国である」

と、イザヤ書にも書いてある。25章6節から8節は素晴らしいところです。

「6**万軍のエホバこの山にてもろもろの民のために肥えたるものをもて宴をもうけ、久しくたくわえたる葡萄酒をもて宴をもうく。髓おおき肥えたるもの久しくたくわえたる清るぶどう酒の宴なり。**

非常に葡萄酒は喜んで飲む。

8**とこしえまで死を呑みたまわん。主エホバはすべての面より涙をぬぐい、全地のうえよりその民の凌辱をのぞき給わん。これはエホバの語りたまえるなり。**」（イザヤ25・6～8）

終末的な、黙示録7章とちょっと相応ずるようなところです。そういう、身体のために非常に百薬の長であるような葡萄酒ですね。

「私という葡萄の樹は自然の葡萄の木よりかもっと凄いんだ」

というのが、この「真の葡萄の樹なり」ということ。

2**おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。**

「私に本当にあれば」、果を結ぶんですけれども、

「私に在って果を結ぶようなことをしない者は」

ということです。そういう枝は本当は「私に在る」枝ではない。枯れ枝になってしまう。時々、枯れ枝というのがありますが、枯れ枝ではいかん。樹液が伝わっているような枝でなくてはね。これは自然の木でもそういう現象があるとおりです。

●汝らは既に潔し

「潔めたもう」というのは、害虫やなにかを除いてしまう。農薬やなんかで潔められたらたまらない。そんなことではない。

3**汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。**

こういう言も非常に普通はつかんでいないですね。

「私が語った言によって既に潔し」

という。

「朝に道を聴かなば夕に死すとも可なり」

と、孔子が言いました。これも聴き入る方です。朝に道を本当に聴いて自分のものとなって、自分が道となれば、夕べに死すとも可なりと。そういう「聴かなば」ということ。

「語りたる言によりてなり」

と。キリストは「聴く」とも言わないで、

「私が語ったからお前たちは既に潔し」

と。

「わが言は霊なり、生命なり」

という。キリストの語っている言は観念ではない、意味ではない。

「私の言は霊であり生命であるから、その霊である生命を私が語れば、受けとっているはずだ。だから、もう潔いのだ」

と。そこまでの内容をこの「語りたる言によりて」と、そういうことをキリストが言われるのだから、普通はわからんわけですよ。だから、

「聖書を読めば、お前には生命がある」

と言われるのと同じことです。聖書を読めばと。読むも聴くもみんな同じです。もともと語る。ここが元です。今度は、見る。キリストの行為を見る。

「わが行為を見たるがゆえに汝は救われたり」

と、そういうことと同じです。本当に見れば、その中に入ってしまう。これも見入るんだ。読み入る、読入。見入。聴入。これが言行一如。言も行もどっちも力を持っている。キリストの実存そのものが生命だからね。それを語ろうが行おうが、全部、力が働く。その効力を持っている。ドイツ語でいうと、「ヴィルクザーム」「働きを持っている」という字です。「ヴィルケン」というのは「作用する」という意味です。必ず効力を持っている。

聖書を読むことが直ちに力を受けとることであり、読むことが直ちに祈り入ることである。みんな即の世界です。即如。即如とはいい言葉だね。即如の世界です。

「さて、どうだ？」

なんていう世界ではない。キリストというひとは、根源現実が常に現象しているんです。内も外も同じなんです。内外相即です。

●我に居れ

だから、「私は葡萄の樹」と言うと、次に「お前たちは枝だ」と今度は言い出した。

4 **我に居れ、**

と。この「居れ」が大事な字です。不定法では「メネイン」という字です。「メノー」。日本語でいうと、その中に「宿る」という訳が一番いい。

「私をお宿としないさい。我に居れ。私のところに入ってきなさい。うちに居なさい」

と。

我に居れ、さらば我なんじらに居らん。

連なる。口語訳では「つながっていなさい」と訳している。「つながる」でもいいけれども、「中に宿っている」ということ。

「私の中に留まっていなさい」

と。

枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば

亦然り。

キリストはいつも父に居るひとです、父の中に。「我は父に居る」と。

「われ父のうちに、父わがうちに」

と、これはしょっちゅう出てくる。ヨハネ伝にはよく出てくる。もうこの関係ですね。内在です。縦でもいいし――横ではない――縦か内かどっちでもいい。とにかくつながっている。お団子のように。神―キリスト―我。葡萄の樹の幹に対する枝。キリストは幹ばっかりではない。根幹です。根っこであり、また幹である。これは頭で

「ああ、そうですか」

ではダメなんですよ、自分で深く冥想してその中に入らないと。だから、祈りというのはそういう意味で大事なんです。ただ言葉でお願いすることではない。深くその中に入る。もうそうしたら、力が働くんだから。

こないだ、自分が一番不幸だと思っていたのが、今度は一番幸いな人になったという、非常に驚くべきことが起きた。癩病人の癩病が治ったようなのと同じような現象です。私が祈った日の翌日に既にもうその現象が顕れて、だいぶボツボツがとれているから、不思議なことが起きたなぁと思った。キリストを本当に受けとると――私ではないです――キリストの力が私を通して働きたもう。それを「ヴィルクザーム」（作用、働き、効力のあること）という。

「語りたる言によりて」

という。だから、私たちの信、交の現実というのは正に、

「エン・クリスト、キリストの中に本当にいるか」

ということ。魂の世界はごまかしがききませんから、思われたる世界ではしょうがない。本当にその中にいなければね。

「キリストと共に十字架せられたり」

という、あの金科玉条のガラテヤ書2章20節がみんな観念になっている。無教会でも。何も起きない。「十字架せられたり」というのは本当に、キリストと共に十字架せられたる世界に自分を入れなくては。そうしたら、自分なんかもう全然、問題なくすっ飛んで行ってしまう。そこにはもの凄い聖霊が来るんです。だから、

「十字架と聖霊とは絶対に離すことができない」

と言っているのはそのことです。「聖霊、聖霊」と言って、祈り三昧で、ちょっとある種の働きがあることがあります。けれども、それはいつもそれでかきたてるようなことであって、そういう事態と違うんです、この使徒たちの現実は。

5 **我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。**

「樹」というのは根幹の意味です。

人もし我におり、我また彼におらば、

もうここにも書いてある。そういう内在関係、即如の関係です。

多くの果を結ぶべし。

ある程度のことはできますよ。けれども、本当の意味で為していないんです、キリストが言われるのは。

「私はもし父のもとにいなければ何もできない」

とキリストははっきりと言ってらっしゃるんだから。自分は何もできないと。けれども、父の中にいるから驚くべきことが可能になる。不可能が全部、可能になってしまう。それが喜びの音信という。常識では不可能なことが可能になる。もう原動力です、何といってもキリストは。キリストは神さまが原動力でした。我々はキリストを原動力とする。というのは、我々は直接に神には行けないです、十字架の贖いを通らなければ。

「我によらでは父のもとに行けない」

という、「よらでは」というのはそのことですから。

「我は門なり」

という。天界への門である。十字架の門を通ったら、聖霊の世界です。

ある牧師さんが、私の讃美歌の一端を聞いて驚いて、ぜひ知りたいと言ってきた。私はこの讃美歌集を贈った。きっと読んでびっくりして、返事が書けないんじゃないかと思った。さっぱり返事がこない。私は今度は、第八巻を『詩歌集』にしますから。来年は、『詩歌集』を出します。この讃美歌をもっとキリスト教界に知らせる必要がある。

●本来の我に帰れ

汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。

「私におれば何事もできる」

と今度は逆に、肯定的にそれを読んでいかないとね。うれしいですよ、何でもできるようになるから。「何でもできる」と言ったって、その人にはいろいろ才能があるからね、私に絵を書けと言ったって、絵は書けないよ。

「お前に与えた才能はどんどん伸びていくぞ」

と、こういうことです。人はそれぞれ賜りたる賜物がある。その賜物が限りなく伸びていく。絵描きは絵描きらしくなる。音楽家は音楽家らしくなる。本当のらしさが出てくる。

私は、昨日、夢の中で、

「我より出て我に帰る」

という文句を夢の中で与えられた。夢の中ではっきりと。

「へぇ、不思議だなぁ」

なんて思った。夢の中で時々、集会したり、いろんなことが起きるものだから。「我より出て我に帰る」の、「我に帰る」の「我」は本来の我です、「神の似姿なる我」。「我より出て」

の方は我執の我で小我。

「小我より出て大我に帰れ」

ということ。これは禅宗的だね。ただし、この帰る道はある。それは禅宗的な悟りでも、ある程度はいきますよ。いきますけれども――ゲーテが

「わが内なる我に対する畏敬の念」

と言ったのがこの我です――この帰る道はこの十字架を通らなくては。十字架を通ると、この我に帰れる。その我とはキリストの中にいる我、「エン・クリスト」の我だから。「キリストによって」（ディア・クリスト）、「キリストの中」（エン・クリスト）に入っている。

もう、ヨハネ伝15章の1節から11節は、あなたがた、暗記しなさいよ。魂で暗記してください。魂で暗記して、魂の中に活ける文字にしてください。毎日、聖句を1章ずつ書いたり――それがただ律法になったらダメだけれども――結構なことです。とにかく、何かみんな自分で工夫してやってください。身になるように。身になるなら、どんなやりかたでもいい。

●求めよ、然らば成らん

ねぇ、楽しいでしょ。

「汝ら、我におらば何事をもなしあとう」

と。

6人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。

おしまいだと。だから、クリスチャンでいて、キリストの中にいなかったら、普通の人よりかダメだということです。信仰をやめろというわけだ。

「信仰をやめて、普通の人のようになって努力精進しろ。普通の努力精進以上の世界に入りたいのなら、しっかり私の中にいろ」

と、こういうわけです。

私は、今ここで学んでいる人たちの年輩の時には、そんな世界にはいなかった。観念信仰でね。観念信仰だけれども、しかし、真面目だったから、とにかく心の世界には響いていた。福音は他のものとは代えられないくらいには正直思っていました。けれども、その頃の思いとしてはそれで正直悪くはなかったんだけれども、

「何かが欠けている」

と思った。その何かがこの御霊の世界だった。

7汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成らん。

同じことです。「言またわが行いなんじらにおらば」と、何でもいいですよ。

その通り。キリストの中に本当にいれば、その望みはもはや自己中心の望みではなくなるから、自分のことについて祈っても、それは自己本位でない。キリストの栄光のため。だから、必ず成っていく。自己中心のことは、たとえ一時成ったように思えても、崩れていきます。まぁ、ヨハネ伝というのは、非常にそういうところはありがたく、ピシャッピシャッと言っているね。

8 **なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、**

ここに書いてある。お前たちの多くの果は全部、父の栄光なんだ。栄光の顕れ、証なんだと。多くの果はみんな神さまの栄光の顕れなんだ。

而して汝等わが弟子とならん。

それが本当の弟子だと。弟子になってからではない。事実が現われた。そしたら、本当の弟子となる。先ず弟子となって決意して、それからではない。人間の決意なんてものは当てにならない。チャランポランのようだがどっこいという、そういう人にならないとね。

●わが愛に居れ

9 **父の我を愛し給いしごとく、**

また、愛していらっしゃるごとく、

我も汝らを愛したり、

9節は非常に大事な言葉です。完了で書いてある。お前たちを愛したと。「アガパオー」という字です。

わが愛に居れ。

今までずっと愛してきた。だから、私の愛の中にいなさいと。キリストの事実はいつも現在にまで及んでいます。ただ過去ではない。キリストの愛にいるということは――愛は生命と同じ――キリストの生命にいるということと同じことです。愛のない生命は生命ではない。「わが愛に居れ」というのは

「わが生命の中に居れ」

ということ。

「お前を助けてやまない、お前を救ってやまない」

というのがキリストの愛ですから。

「七たびを七十倍しても赦してくださる愛」

ですから。聖霊をけがすようなことをして逆らっていたら、そついは撃たれるよ今度は。審かれるよ。

そうしたら、もう寂しいことはないじゃないですか、キリストの愛の中にいたら。キリストの生命の中にいたら。その生命を分けたくなる。そのことはこの次のところに出てくる。今日はその縦の関係を、内の関係を徹底的に言っているところです、この11節までのとこ

ろは。それが今度は横に働きかけていく。それが後半の方です。

「わが縦の愛の中にいろ。そうしたら、お前は横の愛の人になるぞ」

と。クリスチャンはもう寂しいなんていうことがなくなる。まぁ、人間的な寂しさというものはあるでしょうけれどもね。しかし、そうであれば逆に今度は、非常な熱い世界に入る。冷たい人たちが気の毒になる。

10 **なんじら若し、わが誡命（いましめ）をまもらば、我が愛におらん、**

言い方がちょっと面白いね、「誡命をまもらば、我が愛におらん」と。

「我が愛に居れば、誡命を守る」

と逆に言いたいところです。文法的にはやはりそう書いてあるかな。

「わが誡命を守るならば、それをちゃんと心に置いて保っているならば、そうすれば、私の愛の中に留まっている」

と。心にしっかりと保っていることが「守る」という意味ですよ。

「私の愛の中にいれば、誡命は必ず留まるよ」

と、そういう意味にとって一向差し支えない。

キリストの誡命というと、「誡命」という言葉は非常に広い意味では、「トーラー」「律法」、キリストの新しい律法です。キリストの律法は愛の律法だからね。

「それがお前たちの中に本当に留まって生きていれば、私の愛の中にいるのと同じことなんだ」

と、そういうことだね。

「愛の中にいれば、私がいろんな道を示してやる――誡命はそのいろんな道を示してやる――わが道の中におれば」

と。何と言ったって、同じことになってしまう。「誡命」という言葉がとかく、細かい何かのように響きますから、それは躓かないようにしてください。

我わが父の誡命を守りて、その愛に居るがごとし。11 我これらの事を語りたるは、我が喜悦（よろこび）の汝らに在り、かつ汝らの喜悦の満たされん為なり。

●百行一死に如かず

今日は11節までだけども、13節までやっておこうかな。

12 **わが誡命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相（あい）愛せよ。**

なぜ、私は11節で切ったかというと、

「わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ」

と言って、横に来ているでしょ。

「本当に誡命が、縦の関係がつけば、今度は横の関係になってくるぞ」

と。それで私は11節で切ったんです。「誡命」というのはそういうことです。

「わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ」

というのが「私の誡命だ」というのだから。だから、さっきから言っているとおり、「愛の律法」なんです。人助けです。

「人助けが私の誡命だ。私の新しい律法だ。私はお前を助けたろう、救ったろう。

そのように今度は、人を助け救うことになるぞ」

と。それがその12節になるわけです。「互いに相愛せよ」というのがね。

13 **人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。**

今度は、愛の極みを言っている。「その友」と言ったって、「隣人」でいい。

「人その隣人のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし」

と。我々をその隣人として生命を棄てたのはキリストですから。愛の最大は自己を与えることだ。人を奪うことではない。

「百行一死に如かず」

と言ったのはそのことです。百の行為も一つの死にはかなわないと。

「百聞一見に如かず」

からこういう言葉が出てきた。具体的に死ぬことも、それはもちろんそうなんですけれども。

「死を生きている人」

という妙な言葉が今出てきた。

「本当に死を生きている人は、その死を生きる」

という。己を棄ててかかっている生き方です。己を棄ててかかった捨て身の生き方。捨て身の生き方が死を生きるという。真理のために、人のために、捨て身でかかっている。それが死を生きる。死を生きるということは、わがうちなるキリストの生を人に与えることです、生命を、その愛を。同じことです、全部。とにかく、観念でないから、全部それは同じことになる。

それは聖霊の世界だから。聖霊の世界は限りないです。限りなく展開していく。何か妙に悲壮なことではない。非常に力がこっちに来ているからね、御霊の力が。この生も御霊の力を持った生だから、それが働く。

これが葡萄の樹ということ。今度は、我々が葡萄酒を飲むときにはそのつもりで飲まないとね。最後の晩餐で、

「これはわが血なり」

とキリストが言われた。「血」というのは生命のあるところだから。「わが血なり」とは

「わが生命なり」

と同じことですよ。葡萄酒はキリストの生命の象徴なんだ。

そういう内在関係、「居る」という、「メネイン」「メノー」という関係であることが、本当の信の現実だということです。「信仰、信仰」というけれども、本当の信の現実はそのよ

うな愛の現実だということ。信愛、一如なんです。絶対そうです。信ずるとは愛することなり。その事態を全部、力強くしていく原動力は聖霊、助主（たすけぬし）、「パラクレートス」です。

●ああ神よ、願わくは帰りたまえ

ちょっと、詩篇80篇を見てください。著作集第四巻『詩篇珠玉集』の263頁です。これはヘブライ語のアルファベットでできているな、ずっと。私は自分の訳で読んでみます。

「1イスラエルの牧者よ、傾聴し給え、羊群の如くヨセフを導くものよ。ケルビムの上に坐する者よ、光を放ち給え。2エフライム、ベニヤミン、マナセの面前でみ力を振り起こし、来りて我らを救い給え。3神よ、我らを還し、み顔を輝かし給え、さらば我ら救われん。4エホバ、万軍の神よ、いつまで怒気を帯び給うか、汝が民の祈りに対して。5あなたは彼らに涙のパンを喰わせ、大桝（ます）の涙を飲ませ給うた。6あなたは我らを隣人の争いに引き入れ、われらの敵は互いにけなしている。7万軍の神よ、我らを還（かえ）し、み顔を輝かし給え、さらば我ら救われん。8葡萄樹をエジプトからあなたは移し、諸国人（もろくにびと）を追いのけてこれを植えました。9あなたは樹の前を整え、その根を根づかせ、これを国内に蔓延（はびこ）らせ給うた。10山々はその蔭に蔽（おお）われ、神の香柏はその蔓枝（つるえだ）にからまれた。

非常に葡萄は栄えたんだ。

11その樹はその枝を海にまで伸べ、その若枝（わかえ）を河にまで伸ばした。

「海」というのは地中海のこと、「河」とはユーフラテス河のことです。

12なぜあなたはその籬（まがき）を崩して、道ゆく人みなに摘み取らせ給うや。13森の猪（いのこ）はこれを噛み裂き、野の獣らは喰いあらす。14万軍の神よ、いざ還り給え！　諸天から瞰下（みおろ）してご照覧あれ！　この葡萄樹を顧み給え、15汝（な）が右手（めて）の植えたこの樹を、汝（な）がために鍛え育てた子を。16これは火で焼かれ、斬り倒されたが、み顔の怒によって彼らが滅びんことを。17み手を汝（な）が右手（めて）の人の上に按（お）き、汝がために強めた人の子の上に按き給え。18さらば我らはあなたから離れ去らず。我らをながらえしめ給え、み名をこそ我らは呼びまつる。19エホバ、万軍の神よ、我らを還し、み顔を輝かし給え、さらば我らは救われん。」（詩篇80、私訳）

この「我らを還す」という、自分たちは葡萄の樹だということを非常に言っているわけです。そして、

「ああ万軍の神よ、願わくは帰りたまえ、天より附視（ふしみ）てこの葡萄の樹をかえりみ」

と。神さまの方から還ってきて、顧みてくださいと言って、非常に本願を願っている。こ

の祈りが素晴らしい。こちらから帰り行くのではなくて、神さまが帰って来てくださいと。「還(かえ)り給え」という祈りが時々ある。エレミヤ記の中にもあります。

「お母ちゃん、こっちへ来てよ」

と、子供が言うのと同じことでね、子供が倒れてしまって、

「行けませんから、お母ちゃん、来てください」

と。そういうことがこの「帰り給え」ということ。そして、抱き上げて、懐の中に入れてくれと。これがやっぱりそういう願いで、「イン」の世界です。神さまに抱き抱えられるのと、それから、こちらから飛び込んでいくのと、要するに同じことです。ただ上からの力があるから、子供の叫びよりか母親の愛の方が先だから。そういうことです。

「19**ああ万軍の神エホバよ、ふたたび我らをかえしたまえ。なんじのひかりを照らし給え、然らばわれら救(すくい)をえん。**」

と。この詩篇80篇19節の最後の句は素晴らしい句ですね。非常に力強い。

これが葡萄の樹なんです、イスラエルは。この詩篇でもイスラエルはそういった葡萄の樹として自分たちを例えている。だから、キリストはこの詩篇を多分、非常に愛誦されたと思いますね。それから、

「自分は葡萄の樹の幹だ。お前たちは枝だ」

と言われたんでしょう。「エジプトから移した」というのは、イスラエルの民はエジプトにいたでしょ。それからこっちに移した。それを、葡萄の樹をエジプトから移したと言う。エジプトにもともと普通の葡萄の樹があったというのではない。そういう意味で詩篇80篇は非常に大事な詩篇です。

「居る」「留まる」という現実、霊的な御霊における一の世界、ドイツ語でいうと、「ガイステス・フェアブンデンハイト」という、そういう世界です。もうそうしたら、言うことなしです。おわります。